

【聖書】

ルカ福音書^{16:1} イエスは、弟子たちにも次のように言われた。

「ある金持ちに一人の管理人がいた。この男が主人の財産を無駄遣いしていると、告げ口をする者があった。²そこで、主人は彼を呼びつけて言った。『お前について聞いていることがあるが、どうなのか。会計の報告を出しなさい。もう管理を任せておくわけにはいかない。』³管理人は考えた。『どうしようか。主人はわたしから管理の仕事を取り上げようとしている。土を掘る力もないし、物乞いをするのも恥ずかしい。⁴そうだ。こうしよう。管理の仕事をやめさせられても、自分を家に迎えてくれるような者たちを作ればいいのだ。』⁵そこで、管理人は主人に借りのある者を一人一人呼んで、まず最初の人に、『わたしの主人にいくら借りがあるのか』と言った。⁶『油百バツ』と言うと、管理人は言った。『これがあなたの証文だ。急いで、腰を掛けて、五十バツと書き直しなさい。』⁷また別の人には、『あなたは、いくら借りがあるのか』と言った。『小麦百コロス』と言うと、管理人は言った。『これがあなたの証文だ。八十コロスと書き直しなさい。』⁸主人は、この不正な管理人の抜け目のないやり方をほめた。この世の子らは、自分の仲間に対して、光の子らよりも賢くふるまっている。

⁹そこで、わたしは言うておくが、不正にまみれた富で友達を作りなさい。そうしておけば、金がなくなったとき、あなたがたは永遠の住まいに迎え入れてもらえる。¹⁰ごく小さな事に忠実な者は、大きな事にも忠実である。ごく小さな事に不忠実な者は、大きな事にも不忠実である。¹¹だから、不正にまみれた富について忠実でなければ、だれがあなたがたに本当に価値あるものを任せるだろうか。¹²また、他人のものについて忠実でなければ、だれがあなたがたのものを与えてくれるだろうか。¹³どんな召し使いも二人の主人に仕えることはできない。一方を憎んで他方を愛するか、一方に親しんで他方を軽んじるか、どちらかである。あなたがたは、神と富とに仕えることはできない。」

1 月報

月報の第三号ができました。八月は、今日の長崎、六日の広島の前爆投下、十五日の敗戦記念日を迎えるにあたって、月報に中村定治兄が書いてくださった横浜大空襲の体験記を掲載しました。素朴な文章が却って空襲の怖さを物語っている体験記に、当時の横浜の様子が分かる写真を添えたいと思いインターネットを検索し、一枚の写真をを見つけました。米軍の飛行機から

撮影された写真で、無数に立ち昇る火煙の柱で横浜の町が覆い尽くされている様子が映されています。まるで天から叫びを上げる横浜を見下ろしているようで、目が釘付けとなりました。天におられる父なる御神もまたこの衝撃的な光景をご覧になったのか、神はどのように悲しまれただろう、自分が独り子を与えてまで愛した人間達が殺戮しあっている、胸がかきむしられるような想いではなかったろうか、勿論、横浜だけではない、沖縄で、東京で、広島、長崎で、南京で、ソウルで、南西諸島で、世界中ので。人間が自分たちの欲望に任せて殺し合う時、その様子を深い悲しみと痛みと怒りをもってご覧になっているお方がいる、キリスト者は決してその天からの眼差しを、天におられる方の痛みを忘れてはならないのだと思います。

2 難しい譬え話

今日からルカによる福音書第16章に入りますが、冒頭の「不正な管理人」の話は、聖書の譬え話の中でも、最も難しい譬え話の一つだと言われています。同じ主イエスの譬え話でも、直前の15章の三つの譬え話は父なる神の愛がわかりやすく描かれており、聞く者全ての心を揺さぶります。ですが、この不正な管理人の譬えは、理解に苦しむ内容です。管理人は金持ち主人の信頼をよい事に財産を着服し、それがばれると、今度は主人の証文を書き換えさせ、借金のある人に貸しをつくり将来の安定を図ります。徹頭徹尾、自己本位で狡いこの管理人の話。しかし、この譬え話、神がいらっしゃる天から見れば、随分と印象は変わるのかもしれない。

3 光の子ら

天からの目線でこの譬え話を読み解くのに、重要なキーワードがあります。主イエスが弟子たちを呼んでいる「**光の子ら**」という言葉です。8節に出てきます。先週の礼拝では、ゴルヴィツァー牧師の説教を聞きましたが、ゴルヴィツァー先生は、この部分を次のように取り次いでいます。「ヨハネ福音書の冒頭に、人間を照らす神の光、神の言が『**自分の民のところへきたが、民は受け入れなかった**』とあるように、神に逆らって戦いを挑む人間がいたのですが、事はそれだけに留まりません。『**しかし、言は、自分を受け入れた人、その名を信じる人々に神の子となる資格を与えた。**』これは驚くべきこと。地上で神に、光に、抵抗して戦っているすべての人々の戦線、私たちすべての人間が無意識のうちに自然に作り上げている神への反抗戦線がありますが、その前線から脱走兵たちが飛び出して、神の光の側に移ってしまい、光の国の側の戦列に加えられたということです。キリストの教会は、そのような人々が集められて生まれたのです。あなたがたは闇の軍隊から光の軍隊に移った人々。いえ、

あなたがたはおそらく自分で脱走してきたのではありません。この光によって掘み出されたのです。光があなたを捕まえた。あなたがたはそれに抵抗することができません。それが光に属する者達、光の子達です。」十字架のイエス・キリストはわが罪の故に苦しまれその命と引き換えに私を贖いだしてくださったと示され、わが主、わが神と告白する者は、神から見れば「光の子」であり、「神の子となる資格が与えられた者」、天から見て特別な一人一人です。

4 恵みの管理人

しかし、光の子たちが生きるのは、神がおられる天国ではありません。依然として人間の欲望が支配する力は強く、尚も神に逆らう陣営との戦いが続くこの世界の中で、光の子らは生きています。天から見れば、人間がこの世の富の力に如何に弱いかがよく分かるのではないかと思います。人間の歴史は戦争の歴史と言えるほどですが、その原因の大半はこの世の富を巡った争いだと言っていると思います。資源や領地が産みだす富や権力を求めて人々は争い殺し合ってきました。75年前に敗戦した太平洋戦争もそうです。日本帝国は、欧米列強の真似をして、朝鮮半島や中国を侵略し植民地化し富を得ようとしたのです。この世の富というものは、それを追い求める者を捕え支配し、破滅させる悪魔的な力がある事が、天から見ればよく分かります。

神は私たちがそんな世界の中で光の子として生きていく困難さをよくご存知です。だからこそ、途方のない賜物を私たち一人一人に与えてくださっています。私たちはこの神からの賜物をよく管理する事が求められています。ペトロ第一の手紙に、「あなたがたは、それぞれ賜物を授かっているのですから、神のさまざまな恵みの善い管理者として、その賜物を用いて互いに仕えなさい。」とあるとおりです。神から見れば、弟子達も私達も、主人の貴重な宝を委ねられた管理人だという点で譬え話の男と共通しています。主イエスは人間の欲望渦巻くこの世界で「神の恵みの善い管理者」として生きるとはどういう事かを、不正な管理人の譬え話から弟子たちに教えようとしておられます。

5 不正な管理人

譬え話を見ていきましょう。この主人の財産は計り知れないようです。5節から7節に出てくる油百バツスは、高価なオリーブオイル2千3百ℓとなり、小麦粉百コロスは2万3千リットル。これが小作料なのか商売で代金を払っていないものなのかはわかりませんが、どちらにしろ、この主人は並外れた大金持ち。その金持ちに信頼され財産の管理一切を任せられていたのが、主人公の管理人です。彼は主人の財産によって私腹を肥やしていましたが、主人にばれてしまい、失業の危機に瀕します。危機に置かれたこの管理人、彼は自分の

置かれた状況に対して何の甘い見通しも持ちません。主人が考えを変え解雇を取り消してくれるのではないかなんて少しも思わず、客観的に状況を観察し冷静に判断します。自分の将来に集中して真剣に必死で考え抜きました。そして閃いたのは非常に賢い抜け目ない方法でした。この管理人はそれまでの自分のやり方を逆手にとったのです。彼は、今まで、主人に借りがある人の借金をかなり少なめに報告していたのだと思います。本当は油百バトスの借金があるのに、五十バトスと主人に報告し、油百バトスが返済された時には差額の五十バトスを自分の懐にいれる、小麦粉百コロスの借りは、80コロスと報告し、百コロスが返済された時には、20コロスを懐にいれて80コロスを主人の穀物倉庫に収め帳簿にもそう記載する。帳簿と証文と実物を突き合わせれば不正は露見するでしょうが、大金持ちの主人は管理人を信頼して任せてくれているのでそこまではしないと見通しての事。そしてこのからくりがバレそうになると、彼は主人に報告していた額、帳簿どおりの数字に借用証文を書き直させました。これで主人への会計報告と証文と実物の辻褄は合うので主人から訴えられ牢屋に入れられる事もないし、借金を大幅に減らして貰った人たちには恩を売る事もできます。主人が「抜け目がないやつめ」と感心するだけの事はあります。

6 将来に対する真剣さ

でもやっている事は決してよいこととは言えません。主イエスは、弟子たちに、私達に、この不正な管理人から何を学ぶようにと考えておられるのでしょうか。この男の真剣さ、現実を見て判断する抜け目なさではないかと思います。この不正な管理人は、自分の知恵で将来の生活を、将来の安定を確保しようと真剣に考え行動しました。「主人に謝ろうか」なんてことは考えずに、なんとか今の自分に与えられている立場、権利を十二分に用いて、危機を脱し将来を切り開く方法はないかと真剣に考えました。そして閃いたのが、先ほどのやり方であり、それを間髪いれず実行したのです。

弟子たちは、全てを捨てて主イエスについてきました。が、この世の想いは捨てきれず、自分たちの中で誰が一番偉いかと議論するほどでした。そんな弟子の姿を象徴しているのがイスカリオテのユダ。彼は疑いと欲望に呑み込まれて主イエスを裏切ります。光の子として、恵を委ねられた管理人としての立場を真剣に生きる事ができない弟子たちの中途半端さが、主イエスを十字架につけてしまいました。

翻って私たちはどうでしょうか。イエス・キリストの十字架の愛によって捉えられ、闇の陣営から掴み出され光の陣営に移された私たち。ですが、光の子としての恵みの賜物を十二分に活用して真剣にキリストに生きているか？という心もとない。古い自分を捨てきる事が出来ないのを、ぐだぐだと言い訳をし

つつ、主イエスの恵みだけは受けながらも、あわよくば肝心な部分は自分中心に生きたいとする、そんなふうにも生きて神さまが自分を見捨てる事はない…どこか高を括って神の恵みを侮っているような面があるのではないのでしょうか。

主はこの譬えを通して弟子たちに、私たちにこう問われているようです。「光の子とされたあなた方が、もし主人である神から『もう管理を任せておくわけにはいかない』と言われたら、どうするだろうか？この管理人のように、光の子という与えられた立場を十二分に用いて、将来の永遠の命を得る為に真剣に考え、行動に移すだろうか？」

7 不正にまみれた富

だから、主イエスは言います。「不正にまみれた富で友達を作りなさい。」「不正にまみれた富」というのは、犯罪で得たお金という意味ではなく、「この世の富」というようなニュアンスです。ある方が「この世の富には罪の匂いがする」と言いました。うまい表現だと思います。

私たちが生きている現代世界を、天の御神がご覧になれば、圧倒的に不平等な世界。世界の九人に一人が飢えているのですが、先進諸国は大量の食糧を廃棄しています。押入れの中には着る事のない服が眠っています。同じ国でも、かたや大富豪もいれば、奴隷のように働かされる者もいます。「あなたが食べ残したそのパンは、今、飢えている誰かのパン。あなたが着ないそのズボンは、今、裸でいる誰かが着るべきもの」という言葉は、神がご覧になった地上の姿であり、真実です。そして尚悪い事に、現代世界は非常に複雑化しており、私たちは自分達の社会が弱肉強食の獣的な基盤、人間の飽くなき欲望追求を前提とした基盤の上に成り立っている事に気づかずに生かされており、知らず知らずのうちに富を得る為に駆り立てられているのが実情です。神から見れば、欲望の虜になっている歪んだ世界。そこで私達が手にする富は、神の御子である主イエスからすれば「罪の匂いがする富」だと言わざるを得ないでしょう。

8 この世界に生きる

しかし、主イエスは、光の子たちに、そんな罪の匂いのする富を捨てて、歪んだ世界から隠遁し、自分たちだけで清く正しく暮らさなさい…とは仰いけません。なんとと言われるのか？9節「そこで私は言うておくが、不正にまみれた富、この世の富で友達を作りなさい。」―「この不正にまみれた世界の只中にあって、光の子として生きよ！そこで友達を作りなさい」とおっしゃるのです。この世で得た富を、自分の欲望を満たす為に使うのではなくて、この世で困って

いる人たち、小さくされている人々の為に使い、その人たちの友となりなさいとイエス様は招いておられるようです。それは何よりキリスト・イエスの姿です。主イエスは、五つのパンと二匹の魚しかないのに、自分と弟子たちだけではなく、空腹に悩む五千人以上の人々と分け合いました。「真剣に私の姿に倣いなさい、その為に与えられている賜物を十二分に用いなさい」と仰っているのです。

「そうしておけば、あなたがたは永遠の住まいに迎え入れられる。」光の子として主の跡を辿って生きていけば、主の永遠の命に与ることができる、死を超えた命を生きる事ができると主イエスは約束してくださいます。この世の子らが賢く振舞えるのは、自分の死まで。死で終わりを告げる儚い賢さです。8節「この世の子らは、自分の仲間に対しては賢く振舞っている」の「自分の仲間」を直訳すると「同じ時代に生きる人々」。この世の子らが影響力を持つのは同じ時代に生きる人々に対してだけ。彼らは死を超える事はできません。しかし、光の主によって捉えられ、光の陣営に移された私たちは、死を超えた命を与えられ、死を超えた将来に希望を置く事が許されています。主イエスが十字架に死に三日後に永遠の命に甦られ、イエス・キリストの霊、見えない神の子の霊が私たちに与えられているから。

ですから、父なる神が私達に委ねられた途方もない賜物は、イエス・キリストの霊、聖霊と言えるでしょう。私達自身の力でイエス様の姿に倣う事など到底できません、光の子として生きていくことはできません。しかし、見えないイエス・キリストの霊が私達の内に与えられているからこそ、私達は光の子として生きる事ができるのです。

9 不正な富について

主は続けて「不正にまみれた富について忠実でなければ、だれがあなたがたに本当に価値あるものを任せるだろうか」と言われました。この「について」と訳されているギリシャ語は、色んな使われ方をする前置詞ですが、英語の「by」に似て「手段」を表すことがあります。つまり11節の「不正にまみれた富について忠実でなければ」とは、「この世の富によって忠実でなければ」と訳せます。「忠実である」という言葉は、新約聖書では、多くの箇所では「信頼する」とか「信仰する」と訳されている言葉です。誰に忠実だのでしょうか？誰に信頼するのでしょうか？13節からもそれが富に忠実ではない事は明らかです。神に対する忠実、神に対する信頼です。「罪にまみれたこの世の富を使って神に忠実でなければ、誰があなたがたに本当に価値あるものを任せるだろうか」と主は仰っています。「本当に価値あるもの」とは、神の国、神の支配であり、その支配に神の子、キリストの妹、弟として参与する事。パウロが、「キ

リストと共に苦しめば、キリストと共に御国を相続する事になる」と言っていることです。

また主は仰います。「他人のものについて忠実でなければ、だれがあなたがたのものを与えてくれるだろうか。」この世を生きる光の子らに神が委ねてくださる聖霊に忠実に信頼しなくては、神が神の子となる資格を与えたくても与えることはできないのです。

10 与えられた時間はわずか

不正な管理人は、主人から解雇を言い渡されてから実際に追い出されるまでの限られたわずかな時間を充分に利用しました。正式解雇となっていない間、まだ自分のものである財政管理の特権をフルに活かして、将来の保証を固めたのです。同じように私たちに残された時間も無限ではありません。神から見れば僅かな時間でしょう。この世に生かされている間、光の子として与えられている賜物を最大限に利用し、光の子としての務めを果たしなさい…と言って、主イエスは、弟子たちを励まし、私たちも励ましてくださっています。

11 コロナ禍により変わっていく世界

世界を大混乱に陥れている新型コロナウイルスの感染爆発ですが、その影響で指導者の独裁強化が進む国が増えてきているようです。中国、ロシア、ハンガリー、そして日本、約100年前に繰り返された事です。20世紀初頭のスペイン風邪の感染爆発とその十年後にやってきた大恐慌が、日本やドイツなどでファシズム政権誕生に大きな影響を及ぼしたという見方があるそうです。伝染病や不況の中、人々は不安のあまり自己中心的になり自分たちに大きな利益をもたらしてくれそうに見える強力な独裁者を求めるからだとされています。今度の新型コロナの場合は、感染爆発と大不況が同時にやってきますから、これからますます独裁化の流れは進むのではないかと危惧されています。そんな世界にあって、ここ日本で生きる私たちキリスト者達が、与えられた賜物、聖霊を最大限に用いて光の子として真剣に生きる事は、この世界の、この国の将来に決して小さい事ではないと思います。そこに十字架の主イエスが働いて下さるからです。100年前の過ちを繰り返し、自国の利益のみを追い求め他国を苦しめ客観的な状況を見失って破滅するのか、世界の国々と協力してコロナ後の世界の新しい秩序の構築に貢献するのか、それは私たちキリスト者一人一人が神の恵みの賜物を活かして、真剣にキリストに生きるかどうかにかかっています。

聖霊により頼んで、この罪の世をキリスト・イエスに生き抜く事に真剣になる時、私達は光の子としてこの地上に輝く星となります。パウロがフィリピ信徒への手紙で言っている通りです。「あなたがたの内に働いて、御心のままに望ませ、行わせておられるのは神であるからです。何事も、不平や理屈を言わずに行いなさい。そうすれば、とがめられるところのない清い者となり、邪な曲がった時代の中で非の打ちどころのない神の子として、世にあって星のように輝き、命の言葉をしっかりと保つでしよう。」(フィリピ2:13～16前半)。

神とみ使いは天から今も横浜の地をご覧になっています。そこに横浜ナザレン教会に連なる地上の星を見つけ出し、大いに喜ばれるか否か、それは私達一人一人の今日に、明日に懸っています。横浜ナザレン教会に連なる一人一人が本来の光の子としての命を聖霊により頼みつつ歩む事ができますようにと祈り願っています。